

2005年 3月15日

八幡浜市長 高橋英吾 殿
八幡浜市議会議長 楠本正則 殿
八幡浜市教育長 井上傳一郎 殿
八幡浜市教育委員会委員長 二宮正博 殿

社団法人 日本建築学会
会 長 秋山 宏

日土小学校校舎の保存・再生要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

日頃より、本会の活動につきましては多大なご協力を賜り、厚くお礼を申し上げます。

さて、貴市におかれましては、日土小学校校舎の改修を計画しておられる旨うかがっております。

ご承知のように、日土小学校校舎は、当時、貴市建築係勤務の松村正恒の設計により、1956(昭和31)年と1958(昭和33)年の二期に分けて建てられたもので、当時の最新の学校建築の事例として、またその優れたデザインで広く知られております。本会刊行の『建築設計資料集成』でも、学校建築の模範例として紹介されております。また、DOCOMOMO(20世紀の近代建築に歴史的価値を認め、それに関わる建物や史料の保存の意義を訴えることを目的とした国際組織)の日本支部により、日本の近代建築を代表する20の現存建物のひとつに選ばれております。

この日土小学校校舎は、以下の点で保存すべき建物と考えられます。

1) 建築家・松村正恒の代表作である。

松村正恒(1913-93)が愛媛県大洲出身で、武蔵高等工業学校(現・武蔵工業大学)卒業後、昭和初期の新建築の旗手の一人だった土浦亀城(1897-1996)の事務所などを経て、1948年から貴市土木課建築係に勤務し、学校や病院などの設計に携わったことはご承知の通りです。松村の建築は日本の他の地域の建築家からも注目され、1960年の『文藝春秋』で日本を代表する建築家10人のひとり選ばれたほどです。日土小学校校舎は、その松村の代表作として知られています。

2) モダニズム建築の思想を木構造によって具体化した好例である。

近代建築は、合理主義を基盤とし、新しい技術を活用することを重視していました。欧米では、鉄筋コンクリート造や鉄骨造などでそれが試みられましたが、日本ではそれに加えて、木造による近代建築もつくられました。日土小学校はその好例で、開放的な教室をつくるために、鉄の補強材を要所に用いた合理的な木構造を採用しています。

3) 当時の先駆的な試みを取り入れた学校建築である。

日土小学校では、クラスター型と呼ばれる教室配置が採用されています。廊下と教室を切り離し、両者の間に中庭を設けるとともに、2 教室ごとに用意された前室から教室にはいることによって、各教室に親密で落ち着いた雰囲気を生み出しています。戦後の新しい学校づくりを目指していた日本建築学会が研究し提唱しつつあったこの考え方を、地方の一建築技師がいち早く実現していたということで、日土小学校は竣工と同時に建築研究者の注目を集めました。その先駆性は、階段・廊下・昇降口や川側のテラスなど、児童への気配りが随所に感じられるデザインとともに、今日でも高く評価されるものです。

以上のことから、貴市におかれましては、日土小学校校舎の文化的意義と歴史的価値についてあらためてご理解いただき、このかけがえのない文化遺産が永く後世に継承されますよう、格別のご配慮を賜りたくお願い申し上げます次第です。やはり木造の和歌山県高野口町名倉の高野口小学校が、文化的意義と歴史的価値を尊重する再生案の検討提案がなされ、学校関係者や市民の賛同を得ることになった事例などもご参照いただければ幸いです。なお、本会はこの建物の保存に関して、できる限り協力させていただく所存であることを申し添えます。

敬具

日土小学校校舎の建築的・文化的価値

社団法人 日本建築学会
建築歴史・意匠委員会
委員長 陣内 秀信

日土小学校校舎は、八幡浜市を中心に活動した建築家・松村正恒が設計した2階建ての木造建物で、中校舎が1956（昭和31）年に、東校舎が1958（昭和33）年に竣工した。

この建物でまず注目されるのがその平面計画である。とくに教室と廊下の上に空間をとり、そこを中庭とし、教室の独立性を高めて、児童の学習の場にふさわしい落ち着きを与えている。これはクラスター型と呼ばれ、当時の最新の学校建築設計理論に則ったものである。その実例がまだほとんどなかった時代に、四国の小都市の公立小学校でそれが実現したということで、当時の日本の建築界で話題になったが、その先駆性は今でも高く評価できる。

次に、自然が豊かな場所に建つという特性を読み込んだデザインも注目される。校庭の反対側に普通教室を配し、その教室の天井高を高くとって、開放的で自然を楽しめる空間をつくり出している。また、川に向かって張り出したキャンティレバーのテラスも、自然を身近に感じさせる仕掛けとして効いている。そして、1階には水平ルーバー、2階の窓上には軒を張り出して、直射日光を避けているなど、細部にまで周到な配慮が見られる。

構造は木造だが、当時の一般的な木造校舎とは異なり、合わせ柱を用いて強度を確保するとともに壁をカーテンウォールにして、窓面を軽やかな表現にし、要所に筋違などの鉄の補強剤を入れているなど、合理的でモダンな構造計画が展開されている。

設計者・松村正恒（1913-93）は、地方にあって優れた建築をつくり続けた建築家として有名で、その評価は中央の建築界でも高い。上記にも示されているような、合理的な設計姿勢、ユーザーに対する細やかな気配り、それらを統合する優れたデザインセンスが彼の特徴といえる。そして、日土小学校はその松村の代表作として知られる。

松村正恒と日土小学校に対する高い評価は、彼が八幡浜市役所に勤務していた時代から現在まで続いている。特に、DOCOMOMO20選に選ばれて以降、いっそう広く注目を集め、建築関係者に限らず、八幡浜市を訪れる人々が増えている。1999年の、日本建築学会四国支部50周年記念事業の一環として行われた「子どもと学校建築」シンポジウム（松村正恒設計の江戸岡小学校で開催）、2003年の「木の建築フォーラム・木霊の学校 日土小ミニシンポ」、2004年の「夏の建築学校 in 日土」（日土小学校が会場）は、全国から多くの参加者を集めた。

また、日土小学校校舎は学習教材としても活用されており、日土小学校での授業の一環として、校舎の模型づくり、松村正恒や DOCOMOMO についての研究などがおこなわれ、子どもたちに自らの学習の場に関心を抱かせるきっかけにもなった。

このように日土小学校は、八幡浜市内外の人々を結びつけ、子どもたちの眼を文化や歴史へと向けさせるという力をもっている。そのような文化的資源としての有効性に注目しそれを利用することは、これからの地方都市の戦略として、きわめて重要な視点となるだろう。

以上から、日土小学校校舎は、日本における戦後の近代建築の代表例として、またデザインが優れた建物として、そして文化的価値の高い建物として重要と評価される。